



「中上健次と小池辰雄の文体」

五十嵐 昇(余市惠泉塾)

文は文字ではない。血であり思想である。文体はその人の生き方である。

「秋幸は、その働いている体の中がただ穴のようにあった自分が昔を持ち、今をもってしまうのが不思議に思えた。昔のことなど切って棄ててしまいたい。いや、土方をやっている秋幸には、昔のことなど何もなかった。今、働く。今、つるはしで土を掘る。シャベルですくう。つるはしが秋幸だった。シャベルが秋幸だった。」

これは南紀州熊野が生んだ小説家、中上健次の『枯木灘』からの文章である。今から40年前に戦後生まれで初の芥川賞作家となり、自分の出生の地である熊野を題材にして多くの作品を書いた。家系の土建業で働く主人公、秋幸の複雑な男女の血縁関係を中心に、日常的に行われる暴力、強姦、殺人を荒々しく書いた作品が多い。しかし、その中から生まれ、育ち、死んでゆく自然の人間としての新しいエネルギーッシュな生き方、出生に囚われる哀しみと解放への希望の歌がひしひしと伝わって来る。芥川賞を受賞した時、大型新人、新しい時代の文学の旗手として称賛された。だが、中上健次は、これからという時、病に倒れ若くして急逝してしまう。46歳だった。

中上健次の文体はジャズの旋律である。スタッカートだ。作家を目指して東京に出、新宿のジャズ喫茶に通い詰めて生活していた時期があった。彼の生まれ故郷、和歌山県新宮市で、彼を偲んで熊野から新しい文化を発信する「熊野大学」が毎年夏に開かれる。しかし、年々関係者、参加者の高齢化もあるせいか、そこからは、かつての健次の観念ではない、肉が叫び、血がほとばしるような原始的な生命の躍動感の復活はない。

一方、小池辰雄の文体である。例えば今、余市で学んでいる『無の神学』から。「神とイエスの関係は、神意を体现したイエスの『無』的実

存によって貫かれた。神を然りとし、おのれを否とした『無』において、神の義は現わされた。その無的実存の焦点たる事態は何であるか。聖霊のバプテスマである。」(第三章、則天去私の回帰の項)

水谷先生によれば、小池辰雄はドイツ文学者であり、詩人、孤独な伝道者だったという。たたみかけてくる文体は、ヨハネの福音書の冒頭を想わせるが、私には、漢詩、漢文、中国の孤高の詩人を想起させる。

余市惠泉塾の読書会は、先日、三章四章を学んだ。若き日に小池辰雄から「自分の後継者は君だ」と指名された男が読み明かす時、その命が甦える。孤独な伝道者のスピリットは受け継がれ、余市惠泉塾で開花した。そして今や日本各地に、世界へと拡がって行く。

小池辰雄を読む会

●余 市「無の神学」

2016年11月6日(日) 13:30~15:00

余市郡余市町豊丘町370-9 惠泉祈りの家

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:0135-23-9222(木下)

●札 幌 「無者キリスト」

2016年11月5日(土) 13:30~15:00

札幌市南区川沿10条3-10-5 札幌祈りの家

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:011-571-2348(浅井)

●都 賀 「聖書の人ルター」

2016年10月22日(土) 10:00~12:00

2016年11月19日(土) 10:00~12:00

千葉市若葉区都賀3-24-8 都賀プロザ 5F

*会費:1000円

*連絡先:043-235-3815(石丸)

*準備のため、出席のご連絡をお願いします。

*予習不要・初心者歓迎

本図書室は献金で運営されています。

図書室便りは隔月発行です。

小池辰雄伝

その 33

小池牧子

(小池信雄と交互に執筆します)

ドイツにて 日本を愛す

幾年も 音には聞きし ドイツ国
初めて見たる この一瞬や

1961（昭和 36）年 4 月 29 日、単身で西ドイツ
国ハンブルクに降り立った辰雄は、一年間ハンブル
ク大学の交換教授として日本学を講ずることに
なる。

日曜日にルッター派の教会に出かけた。礼拝様式は、カトリックほどではないにしても相当型にはまつもので、無教会畠で育った辰雄にはどうもピンと来ない。辰雄は「ドイツ人の信仰が一般に対象的角度の理解程度であり、真に主体的把握まで突入していない」のを残念に思った。「これが現代キリスト教の弱体化の原因であろう」と記している。

一番なきれないのは、聖書をほとんど教会に持つてこないことである。牧師の読む聖書を聞いているだけ。これでは、ルッター派教会の名に恥じねばならぬ。ルターは、すべてのドイツ人が日ごろ親しむ書するために、ドイツ語訳を作ったはずである。

そこで、牧師から話を頼まれると早速、「私はすでに 3 冊の聖書を読み破って、今使っているのは 4 冊目です。私の聖書はこの通り書き込みだらけだし、これもそろそろダメになりかかっています。皆さん、聖書は私たちの身体の一部分ですよ。聖書を持たずに教会に来るくらいなら、来ない方がいいと言いたいくらいです」と、自分の聖書を開いて見せた。恩師・内村鑑三が開拓した道は、各人が聖書を読んで生きる道であった。その点は何と言っても、無教会は正道を踏んでいると思った。

辰雄が水戸高校生（旧制）時代、ドイツ語を教わったグンデルト先生はすでに 80 歳を越えておられたが、先生を南ドイツのドナウ河畔のご自宅に訪ね、40 年ぶりの再会を果たした。先生は日本学の権威者であり、『碧巖録』の翻訳と解説に没頭しておられた。

グンデルト先生いわく、「ヨーロッパ人は、言語の上で、人称の表現が非常にはつきりしているので、差別相、対象化の傾向が強く、融合の境地にはなかなか入りにくい面を持っている。ところが

日本人はその言語に、人称や主語を略して用いる方が自然の場合が多い。日本人は、自他融合の境地がひらけ易い長所を持っている」と。

このすぐれた言語学者の所見に感動した辰雄は、

「日本人は、すでにかなりなしとげてきた世界の諸精神の融合を（日本の靈性を）再自覚して、さらに雄大になすべき使命を持っていると思う」と、日記に記している。この時の自覚が、「宗教と文化」（1964 年 2 月 4 日東京大学教養学部における最終講義=『無者キリスト』355~378 ページに掲載）の中に結実したのだと筆者は推測する。

楽しみは み空はるけく 東より
飛びて舞い込む 文をよむとき

辰雄がドイツ滞在中の武蔵野幕屋では、夏の特別集会を、箱根芦ノ湖畔・成蹊大学の寮を借りて開催したが、その 3 日間の集会記録（テープ）が時空を越えて届けられた。弟子の三人（荒井大寿、長坂光彦、杉本善男）が、聖書を講じ、感話会と祈祷会とを分担した箱根集会の空気をドイツで吸うことができた。また集会参加者から続々届く感謝のたより（50 通ほど）を読みつつ、辰雄は天国にある心地であった。

武蔵野の幕屋の友らよ ひたぶるに
我らに賜びし この道を往け

*出典=『小池辰雄著作集 第八巻 詩歌集』42~64 ページ「西独ハンブルク生活より」

『小池辰雄著作集 第九巻感想と紀行』306~326 ページ
「ドイツだより」

